

<ラウンドテーブル報告2>

4年後の「出口」を見据えて教育課程全体と初年次教育を どのように構築し、実践するか

【企画者】西村秀雄（金沢工業大学）

【司会者】藤本元啓（金沢工業大学）・柄内文彦（金沢工業大学）

【報告者】西村秀雄（金沢工業大学）・本田康二郎（同志社大学）・
松浦洋司（岡山理科大学）・塚越久美子（北海道工業大学）

1. 企画の趣旨

高等教育機関の中でも工学や医歯薬学、看護学、福祉学系などは、資格取得を含めた「出口」が比較的はっきりしており、学生の目的意識も高いと見なされることが多い。

しかし実際には、主体性をあまり感じられない学生が存在するし、本人なりに目的意識を持っているはずの学生も、話をよく聴いてみると、実際の現場の状況を理解しておらず、興味関心のある分野での夢を語るだけのことが多い。さらにこれらの系統でも学力低下や基礎学習忌避、思考過程軽視、自発的学習習慣や社会常識の欠落、グループ活動が困難な学生の増加などの問題が目立つようになった。

これらの諸問題を早期に乗り越えて、自ら考えて行動できる、それなりの学生に変身してもらうためには、「出口」の再確認と、専門教育との連携を含めた教育課程全体の見直し、そして各学校にふさわしい初年次教育体制の構築と実践が必要であろう。本ラウンドテーブルでは、すでに実績を上げている同志社大学商学部、新しい取組みを開始した岡山理科大学工学部、初年次教育にこれから本格的に取り組む北海道工業大学の取組みを具体的に紹介することを通して、参加者と意見や情報を交換する場の形成を目指した。（西村）

2. 同志社大学商学部の初年次教育

同志社大学商学部では一学年約800名の学生を抱えており、周囲の人たちと友人関係を

構築することが困難な一部の新生生に対しては、特別の注意を払う必要がある。

彼らを学園共同体の一員として迎え、修学意欲を高めていくためには、教員との密なコミュニケーション機会が必要である。そこで1年生を対象とした導入教育科目として、2004年より「アカデミック・リテラシー」（前期）と「ビジネス・トピックス」（後期）という二つの科目が開講されている。どちらも、クラス約20名の少人数クラスで行うことを原則としており、学生間、学生一教員間のコミュニケーションが緊密になるように配慮されている。

「アカデミック・リテラシー」では、二つのことが目指されている。一つは大学で学ぶための基本的技術を身につけさせることであり、もう一つは学園共同体に参加する機会を用意することである。大学で学ぶための基本的技能としては、ノートの取り方、テキストの読み方、図書館の利用法、パワーポイントを利用したプレゼンテーション実習、ディスカッションなどが含まれる。これらの学習に加え、大学史を学ぶことと、学生間のコミュニケーションの機会を与えることで、受講者に学園共同体の一員としての自覚を促すことが目指されている。

「ビジネス・トピックス」では、ビデオ教材、企業見学などを通じて、経済活動の現実を知り、経済問題への関心を高める。前期のアカデミック・リテラシーでの活動を受けて、こ

の科目でも班ごとのグループ学習を行う。共同して調査、議論、発表を行うことで受講者同士のコミュニケーション能力を高めることが目指されている。(本田)

3. 岡山理科大学工学部

これまでの工学教育では高度な専門知識を持つスペシャリスト的技術者を養成してきた。これらに加えて、これからの工学教育には、ものづくり全般についての幅広い知識と視野を持ったゼネラリスト的技術者、すなわち将来プロジェクトリーダーとなる人材を養成する教育プログラムが必要となっている。

このような実践的かつ学問的な工学教育を行うには、これまでの学科に分かれた教育ではなく学科横断的な教育が必要となる。そこで、ものづくり演習やプロジェクト実践を大幅に取り入れるとともに学科横断的に工学教育を行う「工学プロジェクトコース」を設置した。

工学に関して学習意欲を持つ学生でも、実験や工作などの実体験が乏しく、工学やものづくりに対する現実感や目的意識の欠如が指摘されていることから、このような教育プログラムは教育上有効と考えられる。また、ものづくりプロジェクトはグループで実施していくため、コミュニケーション力やプレゼンテーション力などの学士力の向上にもつながると考えられる。さらに、低学年でプロジェクト等を通して様々な工学分野に触れることにより、自分の持つ能力や適性を見だし、高学年や大学院で専門分野を決めていく自己能力発見志向の学生にも適しているといえる。

本コースの入学定員は20名とし、15名の工学部教員が担当し、学生の興味に応じた指導を行う。

また、「工学プロジェクトセミナーⅠ・Ⅱ」(1年次)、「プロジェクトⅠ～Ⅳ」「プロジェクトマネジメントⅠ・Ⅱ」(2・3年次)などのものづくり実践科目を用意している。(松浦)

4. 北海道工業大学

北海道工業大学では、持ち上がり担任制やポートフォリオの記録などの在学中のサポート体制や、全学科共通の就職支援プログラムが整っており、「出口」を意識した教育環境が充実していると言える。しかし初年次教育に関しては、年々増える低学力者への対応、留年・中退防止策として取りざたされているものの、まだ統一されたシステムがなく、各学科がそれぞれプログラムを考え、独自に実施している状態である。

初年次教育科目の主なもの、大学生生活への移行を促し、スタディスキルの習得を目指す「フレッシュマン・セミナー」(①)、専門教育の入門「〇〇入門、〇〇概論」(②)、①と②両方の要素を持つ「フレッシュマン・セミナー／〇〇入門／基礎ゼミ」(③)の3種類があり、すべて専門学科の教員が担当している。①を実施しているのは8学科中1学科のみで、②は3学科、③は4学科である。大学全体で①の履修体制を整えるのが理想的だが、それには各学科の意向の統一、担当者などの問題が山積し、システム構築にはまだ時間がかかりそうである。

筆者は7学科の「文章表現法」を担当しているが、すべて1年生前期に設定されていることを生かして、この科目の中で大学生としての基本的な学習スキルの習得が図れるような授業実践を試みている。今年度より教養教員が専門学科に分属され、横の連携が取りにくい状態にはあるが、1年生の教育に必ず関わっている教養教員が、まずは初年次教育の概念を共有し、できることから実践し成果を示すことが必要であると思う。その上で、配属された学科内で専門科目との連携を図りながら、全体のシステム構築に向けた提言をしていければと考えている。(塚越)